ELF
Published by Tokyo Gakugei University.

Learning the village by strolling through

もありますが、事後の礼状が大事です。数回の調査が可能であれば、前回お世話になった方に、挨拶がてら、お礼の品（高価ではない気持ちが伝わるもの）を持って訪ねるとよいと思います。

5）聞き取り調査の方法

①始めに、目的と知りたいことをきちんと伝えること。

②フィールドに足を運ぶ回数を重ねること。

目的を伝えた上で、基本は話し手（情報提供者、インフォーマント）に話をしていただくことがよいでしょう。聞き取り調査は、良い意味での探りあいによる協働作業です。相手もこちらのことを、何が知りたいのかと探っています。協力してもらうには、こちらの意図をちゃんと伝えることが重要です。「そういうことが知りたかったんですよ。」と嬉しそうに質問を進めれば、相手もそうかそうかと答えてくれることが多いようです。

気になるキーワードがあった場合は、オウム返しをして、さらに話をしてもらうようにすると良いでしょう。こちらから、先まわしして、誘導しないように心がけることが重要です。例えば、地方名があるものでも、調査者が先に名前を口に出してしまうことで、地方名を知るチャンスを逃してしまうことがあります。

できるだけ対象者に近しい心情で、かつできるだけ調査者として客観的視点を持って進める必要がありますが、とても難しいことですが重要です。感想や意見、認識等で、仮設と異なる回答を得た場合、理由を尋ねることで、その言葉を正しく解釈ができるようにします。

6）データの記録方法

メモには、必ず調査日と調査場所、対象者とその年齢を書き込みます。「子どもの頃には～」という表現があった場合に、その年代が特定できるためです。「昔は～」という場合も、年代の特定はその場でしておくことです。

データの解釈は、調査者によります。だからこそ、聞き取りデータは大事に扱い、気軽に勝手な分析をしてしまわないように、基礎的文献調査や他の地域との比較が重要です。

後から、ニュアンスが変わってしまうことを避け、調査者が勝手な解釈をしてしまわないように、言葉をそのままメモすることも重要です。特に相手の考えや思いを聞き取りたい場合は、そのまま記録すべきです。

話し手が知人について話しをした場合は、その人の主観が入っているので、参考情報として受け取ります。データとするには、本人への聞き取り調査を行うべきです。すでに亡くなった方の場合は、その家族など近しい関係の人に聞き取りを行うと良いでしょう。

調査者の主観的な記録をメモする場合は、その根拠も書き加え、聞き取ったデータと混ざらないようにします。

7）調査終了後のデータ整理

聞き取り調査でフィールド・ノートにメモしたものは、できるだけ早めにパソコンに打ち込むか、ノートに整理しておきます。時間がたつと、記憶も薄れて折角とった記録も整理しにくくなり、正確さを欠きやすいものです。情報の整理には、KJ 法（川喜田二郎の発想法）を用いることは、とても有効です。ばらばらに存在する事象の関係性を見出し、全体像を創造してみます。

3.「むら散歩」プログラムと展開

1）「むら散歩」プログラムのねらい

「むら散歩」プログラムは、大人のみならず、子ども対象体験学習プログラムとしても有効です。参加者一人ひとりの興味関心や気づきを大切にしたプログラムとして展開ができます。基本コースの選択はスタッフがねらいを持って行いますが、天候などの偶然性や参加者の興味関心によって、寄り道やコース変更を取り入れながら行うことで、参加者の主体的な活動となります。コース選択は、対象者の年齢や発達に応じ、距離や歩きやすさ、安全面に配慮します。

「むら散歩」からの展開プログラムについて、実践例を紹介すると、みんなで通りかかった畑で見たことがない在来のトウモロコシを見つけ、畑にいたむら人からこのトウモロコシの昔からの話をうかがいました。そして、その場で収穫物をいただいて、伝統的な調理方法を教えていただきました。すると、その調理をみんなでやってみようという展開が参加者から提案されるということがよくあります。このような事例では、むらの自然誌と文化誌、そして食べ物や作物の種の継承に関する価値観までにも触れることができ、主体的な体験により、理解と愛着を深めることができたといえるでしょう。「むら散歩」を生物文化多様性の学習として行う際に、最重要な観点は、異質な別世界への招待ではないということです。自然と生活との融合が見られる山村の暮らしは、都市に生活する大人や子どもにとっては、新鮮なものと感じられることでしょう。それをスタッフの言葉かけなどの援助によって、日常の生活とつなげることが理解を進めるのです。

2）「むら散歩」からの発展

スタッフや参加者が、発見したその地域の特色や魅力は、地域の宝です。地域づくりは、まずは地域をよく知り、地域の宝を掘り起こし、つなげていくことが基本にあります。学習者が伝統的な知恵や生物文化多様性学習を進めることは、学習フィールドとなる地域にとっても意味深いものとなります。それらをエコミュージアム概念に照らし合わせ、既存のものをサテライトとして位置づけを行い、関係性を確認し深めていくことで、さらにエコミュージアムづくりの視点での地域づくりへと発展させることもできます。

山村は生物文化多様性が存在する場としても、学習の場としても、とても価値あるフィールドです。そこに住む人達と訪ねる人達、そこから恩恵を受ける人達、全ての人達にとって、大切にすべきフィールドなのです。

生物文化多様性学習としての「むら散歩」プログラムづくり

Learning the village by strolling through

井村礼恵
植物と人々の博物館プロジェクト　研究員
鶴川女子短期大学講師

1．山村における生物文化多様性

1）学習の場としての山村

「むら散歩」はネーミングの通り、地域を「歩く」ということを大事にした体験学習プログラムで、山村をフィールドとして行います。このプログラムづくりを行うことを通じたスタッフ自身の学習についてとりあげます。

人間は地域環境の中で自然を認識し、そこで生きるための知恵を働かせ、生活文化を創造し継承してきました。けれども、社会背景の変化とともに、生物多様性の保全とかかわる伝統的な生活文化の伝承が希薄になっています。つまり、私達が生物文化多様性を実体験の中で知ろうとするには、その場がとても少なくなっているのです。そのような現況の中、山村という「むら」には、今なお伝統的な生活文化が残されており、文化とともに生物文化多様性の価値観が伝承されてきています。生物文化多様性というものを理解し学習する上で、山村という学習フィールドはとても重要な意味がある場なのです。

2）「歩く」中で思索する

地域を知る上で、「歩く」という速度感がとても有効だと考えます。「歩く」ことで、地域の気温、湿度、地形、植生、土地利用などの基本的環境条件を実際に目にすることができます。また、川の音や鳥の声あるいは生活音に耳を傾け、季節ごとの様々な香りを体感することができ、一部の切り取りではないつながりあっている住民の何気ない日常の暮らしを垣間見ることができます。民俗学者宮本常一は月刊旅雑誌名を「あるく みる きく」（昭和 42 年発刊）として、地域に暮らしてきた人びとの知恵と意志を発見する民俗学調査を行ってきました。「むら散歩」プログラム参加者とそのプログラムを計画するスタッフは、実際に地域を歩き、いろいろなものを観察し、住民にインタビュー（聞き取り）をすることで、たくさんの発見の中で、地域の内面に近づき、地域で伝承されてきた世界観について知り、参加者が思索することにつなげていけることを期待しています。そして、自らがスタッフとしてプログラムづくりを行う過程で、自らの環境観を振り返り、他者に伝えたいことを見つけるという作業によって主体性を持って点在するように見える事象の関係性を発見していくこととなります。

2．プログラムづくりの基礎となる　スタッフの調査学習

1）基礎となる学び

スタッフは、プログラムづくりの基礎となるフィールドの観察と聞き取り調査を行います。それを元に、大人対象、子ども対象プログラムづくりを行います。単なる自然環境の観察ではなく、住民やその暮らし方との出会いによって、生物文化多様性についての理解が深まります。体験学習プログラムでは、案内・仲介役、助言者としてのスタッフは大きな役割を果たします。そのため、スタッフ自身がフィールドに対するスタッフ自身の認識形成を進めることが前提となります。また、「むら散歩」での発見や興味関心から展開プログラムが多数生まれることが期待できます。そのプログラム実現や講師選出のための基礎的情報の蓄積という視点でも、スタッフ自身のフィールド調査は学びとなり、基礎となります。参加者の発見や気づきを声がけなどによって、文化誌と自然誌のかかわりの視点でつないでいけるかがポイントとなります。
調査学習では、民族植物学、民族生態学などの自然誌と文化誌が複合された視点を持って、観察と聞き取りを進めましょう。地域住民が自然をどう認識し利用してきたのか、それによってどのような多様性が保たれてきたのかを明らかにすることを目的とします。そして、調査結果から得られた伝統的な智恵や世界観から生物文化多様性について考えます。そこから、「むら散歩」プログラムづくりを考えます。

2）観察とインタビューによる調査学習

インタビュー（聞き取り）とは、フィールド・ワークの手法のひとつ（聞き取り調査、参与観察など）で、人類学、社会学、民俗学、民族学など様々な分野において、行われている調査方法です。

問題設定 ⇒ 予備調査と文献研究 ⇒ 仮説だて
⇒ フィールド・ワーク
⇒ データ収集 ⇒ データ分析

聞き取りをした上で、さらに、質問紙によるアンケート調査を行って、その結果をもとに、数量的な分析と、補足の聞き取り調査を行う方法もあります。

インタビューを行うには、まずは自らが観察をよく行うことが重要です。見逃してしまいがちな事象も、目的意識を持つことで、新たな発見をすることができます。

このようなフィールドワークを学習として活用し、プログラムづくりの基礎とします。

2）調査学習の方法と準備物

＜対象者＞

生物文化多様性を学習しようとする大人

＜人数＞

ひとり、もしくは小グループ（5～6人程度まで）を構成する

＜準備物＞

＊フィールド・ノート（野帳）

見聞きしたこと、気付いたこと、疑問など、どんなことでも、その場でメモをとります。雨などの水分に強く、表紙が硬く書きやすいものが使いやすいです。図やイラストも書き込みやすいものがよく、方眼があればスケールにもなります。

＊デジタルカメラ

記録用として用います。撮影後に、その画像を見せて、別の人に聞き取りを進めることもできます。メモやイラストでの記録と併用することで情報の正確さを深めることができます。

▲伝統芸能
▲もつ煮
▲冬のむら散歩
▲猟師の獲物解体作業
▲落ち葉あつめ
▲収穫
▲山村の風景

＊地図

参加者自身の位置の確定と、聞き取り調査の中ででてきた地名をその場で確認するために、地図を持ち歩きます。地図に気づいたことを書き込んでいくデータ記録方法もあります。2万5千分の1の地形図、フイラスト・マップ、白地図、住宅地図（縮尺 1/1000 から 1/2000）、などを用意します。コンパス（方位磁針）もあると便利です。

＊その他

雨具、携帯食、水筒、公共交通機関時刻表など必要に応じて用意します。ビデオカメラや音声レコーダーは、基本的にお奨めしません。なぜなら、テープ起こし作業には時間が要することと、音声記録に頼りがちになるためです。録音という記録方法をとることで、話し手（情報提供者：インフォーマント）も言葉を選ぶので、本音を聴くチャンスを逃すこともあります。使用する場合は、必然性がある時のみ、了解を得てから行います。

また、各学習者ごとに具体的な興味関心の糸口は異なることでしょう。そのため、自分の名刺を渡し、所属を伝えることで、相手にこちらの興味関心を理解していただき、話が弾むこともあります。また、後から思い出したことを連絡してくれることもあるかもしれません。必要な場面になったら、すぐに渡せるように準備をしておくとよいです。どこで、どのようなチャンスが得られるかわからないため、こういった聞き取り調査道具一式はフィールドでは常に持ち歩くとよいです。

事前事後補足としては町誌･村誌のような地域の郷土資料や、現在の地域紹介資料（観光資料等）をあたるとよいでしょう。

3）聞き取り調査の導入

聞き取り調査は、常に「一期一会！！」です。「今度また」の機会はもうないかもしれないを基本にしましょう。

毎回の調査において、「今回はこれとこれを明らかにする」という自分の目標項目をたてます。ただし、初めてフィールドに入った時の感触・感覚は大事にして、初回の調査日に凝り固まった調査表を用意しなくともよいでしょう。具体的な調査表を作成するための準備としての予備調査を行う必要があります。

山村において、役場は大きな窓口です。まずは、資料入手やインフォーマントになりそうな人を紹介してもらうため、調査のたびに顔を出しておくと、情報が得られることが多々あります。民宿なども観光客などに地域の説明をすることに慣れているので、最初のインフォーマント探しには、かなり助けになることが多いです。

4）フィールド･ワークの心得　原則「郷に入っては､郷に従え」

インフォーマントや地域からの信頼関係を築けるよう最善を尽くします。特別なことではなく、挨拶などの基本的なコミュニケーションが大事です。話し手は調査につきあってくれているのです。謙虚な気持ちを忘れずにいましょう。

「交換の法則」を忘れず、お礼をします。労働力や物など